



TITLE:

神惟孝ノ事ニ就キ鈴木券太郎氏ニ
答フ

AUTHOR(S):

瀧本, 誠一

CITATION:

瀧本, 誠一. 神惟孝ノ事ニ就キ鈴木券太郎氏ニ答フ. 經濟論叢 1916, 3(4): 601-612

ISSUE DATE:

1916-10-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/127089>

RIGHT:

京都帝國大學法學科大學

經濟叢論

第四號

第三卷

故法學博士井上密君肖像并哀辭

論說

對露輸出代金決済方法

國防稅ノ當否(三、完)

代表紙幣ト獨立紙幣(二)

課稅ト獨占價格(二)

戰後ノ人口増加政策(三)

保險本質論(二、完)

雜錄

重子 在外正貨問題ナ
テ河津博士ニ答フ

公營造物ニ關スル美濃部鐵田松本三博士ノ所論
ヲ讀ミテ東京市電車舊乘車券問題ニ及ブ(二)

支那ニ於人口過剩論ノ梗概

移民政策^{上ヨリ}觀タル邦人同化問題

村落共產體ノ發達

らぐれー『ミール』學說ノ研究(三、完)

過去^{ニ於}ケル和蘭ノ植民の活動

神惟孝^{ノ事ニ就キ}鈴木券太郎氏ニ答フ

漬物机上觀

法學博士 戸田 海市

法學博士 神戶 正雄

法學士 作田 莊一

文學士 高田 保馬

米田 庄太郎

法學士 小島 昌太郎

法學博士 神戶 正雄

法學博士 福田 德三

鈴木 券太郎

山本 美越乃

法學士 本庄 榮治郎

商學士 大塚 金之助

山本 美越乃

瀧本 誠一

法學士 財部 靜治

(載 轉 禁)

神惟孝ノ事ニ就キ鈴木 券太郎氏ニ答フ

瀧 本 誠 一

余ハ拙ニ「日本經濟叢書」ニ中井竹山ノ「草茅危言」ヲ收録シタル
雜 錄 神惟孝ノ事ニ就キ鈴木券太郎氏ニ答フ

ニ因ミ、近日又「草茅危言摘義」ナルモノヲ收録シタノデアル、
該書ハ備前ノ人、神惟孝ト稱スル者ノ著作デアツテ、其ノ内容
ハ純乎タル腐儒ノ口調ヲ以テ、迂論愚説ヲ臚列シ、以テ竹山カ
義ヲ云フズシテ利ヲ説キタルハ、聖人ノ教ニ反ハルト云フコト
ナ、痛ク非難シタモノデアアル、竹山ノ説必ズシモ是ナルニアラ
ザレバ、之ヲ非難スルコト、固ヨリ不可ナラズト雖、惟孝ノ「摘
義」ノ如キハ、全タ村夫子ノ月並譯釋デアツテ、我が經濟學上ニ
ハ、左迄ノ價直アルモノニアラザレドモ、竹山ノ「危言」ヲ讀ム
者ノ參考マアニ、收録シタル次第デアアル、故ニ余ガ叢書ノ「解
題」ノ如キモ、成ルベク之ヲ省畧シテ、其ノ著者タル惟孝ノ傳記
ナドハ、極メテ簡單ニ記シテ置タ積リデアツタノデアアル、然ル
ニ惟孝ノ郷里及惟孝其人ノ遺族ニ、緣故ノ淺カラザル鈴木券太
郎氏ハ、前々號及前號ノ「經濟論叢」ニ於テ、余ガ「摘義」ノ解題
ヲ疎漏ナリトシテ、大ニ叱正ヲ賜ハリ、且ツ御鄭重ニモ、惟孝
及其ノ子女ノ履歷、容貝、移轉先キ、戒名、頭蓋ノ大サマデ、事
細カニ報告セラレタルハ、余ノ深ク感謝スル所デアアル、依テ余
ハ先ツ鈴木氏ニ對スル禮儀トシテ、同氏ノ指摘セラレタル、余
カ疎漏ノ過ヲ告白シ、且誤謬ノ廉廉ナ是正シテ「叢書」ノ讀者ニ
謝スルト同時ニ、更ラニ鈴木氏ニ向ツテ、二三ノ教ヲ請ハント
欲スルノデアアル

(一) 鈴木氏カ指摘セラレタル第一ノ點ハ、余ガ惟
孝ハ醫ヲ業トシタリト云ヘルニ對シ、醫ニアラ
ズ儒ナリト正サレタルコトデアアル、鈴木氏ハ「余

ノ抱有スル智識ノ範圍ニアリテハ、未タ醫家タルコトヲ肯定スル能ハス、惟孝ノ三子(實ハ養子)惟章氏ノ如キハ「惟孝少壯講學ノ餘暇、醫書ヲ讀ミタリシコトヲ聞キシモ、京師ニ於テモ江戸ニ於テモ、醫ヲ業トシタルコト、嘗テ之レナシ」ト言明セリト云ハレタリ、果シテ然リトスレバ、余ノ記シタルコトハ誤聞デアル、謹テ之ヲ是正スベシ、然レドモ鈴木氏ガ、余ノ言ヲ以テ「虛構歟」ナドト疑ハレタルハ、余ノ甚タ解セザル所デアル、余ノ記事ノ出處ハ馬島瑞園ト稱スル人ノ話デアル、瑞園氏ハ今年既ニ九十歳ニ向ントスル老人デアツテ、此人ハ會津ノ醫者デ、詩書ヲ能クシ、壯年ヨリ江戸ニ出テテ、文人墨客ノ間ニ周旋シ、安政文久頃ノ「文雅人名錄」ニモ、其ノ姓名ヲ載セラレテ居ルモノデアル、余ハ嘗テ此ノ人ヨリ、惟孝ノ書幅ヲ譲受ケタコトアリ、其ノ當時ノ話ニ「惟孝ハ御玉ヶ池邊デ、醫者ヲシテ居ツタコトアツテ、自分モ少時面識アリ、ヲボロゲニ其ノ風采ヲ記憶セリ」ト云ツタノデアル、瑞園氏ハ現在書畫社會ニ在ツテ、兎ヤ

角批評スルモノアリ、其ノ言フ所、皆必スシモ深ク信スルニハ足ラザルモ、余ハ此ノ話ニ付キテハ、瑞園氏ノ言ニ毫モ疑ヲ挾マナカツタノデアル、其ノ譯ハ徳川時代ニ於テ、儒者ト稱スルモノノ多クハ、諸侯ニ抱ヘラレテ、扶持米ヲ貰ハザル以上ハ、逆モ教授ヲ以テ生計ヲ立ツルコトハ、出來ナカツタノデアル、故ニ惟孝ノ如キモノガ、生計ノ爲メニ、醫ヲ業トスルト云フコトハ、勿論アリ勝ノコトデアル、殊ニ「摘義」ノ中ニハ、惟孝自ラ人ノ師表タルベキ儒者ハ、醫家、社官或ハ士分以上ノ人々中ヨリ擇ムベシナドト主張シ、又其ノ著作「居業餘錄」ニハ「治痘ノ事、及河豚ノ中毒ヲ治スル處方」ナド、支那書ヨリ抜抄シタルモノアレバ、旁々以テ瑞園氏ノ言ヲ信用シテ居ツタノデアル、然ルニ今現ニ惟孝ノ養子惟章氏ガ、醫者デナイト言明セラルルトアレバ、瑞園氏ノ言ハ。事實ノ相違デアツテ、余ハ全ク誤聞ヲ傳ヘタ責メハ免カレナイノデアルガ、之ヲ以テ虚構トセラルルハ、人ヲ誣フルノ甚タシキモノデアル、學者ノ態度ニアル可ラ

ザルコトデアル、余ハ鈴木氏ニ向ヒ、今後他人ノ言ヲ批評セラルルニハ、少シク言葉ヲ慎マレンコトヲ希望スルノデアル

(二) 鈴木氏ハ前々號ノ「論叢」ニ於テ、瀧本氏ハ惟孝カ天保年間江戸ニ出デシモノノ如ク記スルモ、惟孝ハ其頃京師ニ居リシ事實ヲ遺忘セルナリ」ト云ヒ彼レハ天保年間ニ江戸ニ出デタルコトハ、決シテ之レガキガ如ク、謂ハレタルモ、前號ノ「論叢」ニ於デハ、惟孝ガ米庵ノ小山林堂書齋交房圖録ノ跋言ニ「天保間始識ニ翁於日野相公座」トアルハ、京師ノ事ニアラズシテ、惟孝ガ江戸ニ下リ、日野相公ノ在府中、初メテ米庵ト面識ニナルコトト、解スルヲ穩當トスベシト云ヘタリ、左スレバ惟孝ハ、天保年間ニ江戸ニ居ツタコトアルハ、鈴木氏自ラ遺忘シテ居ラレタルモノラシカ思ハルノデアル、但シソレニシテモ鈴木氏が「人トナリ溫厚篤實ニシテ……頭蓋ノ發達大」ナリトテ熱心ニ吹聴サルル、惟德氏(惟孝ノ實子)ノ自記ナルモノハ(惟孝ハ京師ニアリテ米庵ト交盟セシ云云ノコト)全ク事實ノ誤聞(余ハ虛構トハ云ハズ)デアツタモノナルカ、如何

(三) 鈴木氏ハ余ガ「解題」中ニ、惟孝ノ京師ニ在ツテ縉紳ニ交リタル事ヲ記ササリシヲ、指摘シテ「瀧本氏悉ク之ヲ看道ガサレタルガ如シ」ト評サレタルハ、是レ又余ノ解セサル所デアル、余ハ余ノ簡單ナル「解題」中ニ惟孝ニ關スル總テノ事

柄ヲ記述スルノ責任アリト感シテ居ラナカツタノミナラズ、尙今デモソウ感シテ居ラヌノデアル、元來惟孝ハ鈴木氏ノ引證セラルル如ク「余ガ家禁垣ニ接ス故ニ常常縉紳ニ交ルコト日トシテ是ナキハナシ」ナドト云ツテ居ルモ、是レハ全ク惟孝一流ノ誇張ノ言デアラフ、當時一個ノ浪人ニシテ而カモ其後十數年ニ、自ラ甘シジテ一齋ノ門下ニ屈從シタルガ如キ、名モナキ一書生ガ日日縉紳ト交際シテ居ツタナドトハ、非常ノ特例ノ外ハ、決シテアリ得ベカラザル事實デアル、殊ニ惟孝自ラ「摘義」ニ於テ、本邦ハ封建世祿ノ制ナレバ、民ハ俊秀ト雖、官ニ進ムコトヲ得ス、貴賤ノ等常ニ判然タリ、故ニ上下相混スルトキハ、却テ上ノ人人、下ザマノ鄙習移リヤスク、又俊秀ニモ益ナク、貴賤ノ等モ亂ルルヤウニ成テハ、却テ宜カルマジ」ト云ヒ、頻リニ貴賤ノ等列、閥閥ノ次第ヲ紊ル可ラサルコトヲ主張シテ居ル位デアルカラ、コレガ惟孝ノ眞意トスレバ、彼ガ「縉紳ニ交ル」云云ト云フハ、普通ノ意味ノ交リデナク、俗ニ所謂ル「お出入」ヲ勤

メテ居ツタト云フ位ノコトニ過ギサルベシト信スルノデアル、且又鈴木氏ハ惟孝ガ「京師ニ在リテ不如學齋ヲ開設シ、子弟ヲ提擲シタリシハ、天保元年ヨリ弘化三年秋ニ至ル間ナリトス」ト官明シ、惟孝ハ左モ私塾ラシキモノニテモ開設シテ、相當ニ子弟ヲ教育シテ居ツタラシク云ハレタルモ、事實ハ必スシモンウデアルマイト推測セラルルノデアル、鈴木氏ハ此ノ點ニ付嘉永版ノ「平安人物誌」中、儒家ノ部ニ「神惟孝」ノ名アルコトヲ發見セラレ、之ヲ倔強ノ證據トシテ述ベラレタルモ、是レハ笑止千萬ノ話デアル、一體嘉永版トハ、嘉永何年ノ出版ナルカ、伺ヒタイノデアル、鈴木氏ノ説ニ依リ、惟孝ガ京師ヲ去ツタノヲ弘化三年トスレバ、嘉永元年ハ惟孝ノ去後、翌々年ノコトナレバ、好シ元年版ナルモノガアツタト假定スルモ（余ガ收藏セル嘉永五年版ノ平安人物誌ハ、惟孝京師ヲ去ツテ七年後ノ出版ナレドモ、コレニハ惟孝ノ姓名ヲ掲ケアルコト、鈴木氏ノ言ノ如シ、是レガ惟孝ノ凡儒ナラサル所以カモ知ル可ラズ）惟孝ノ事ハ、

彼カ江戸ニ出デタル跡ノ祭ノ記事デアツテ、而カモ彼ガ不如學齋ヲ開設シテ、盛ニ子弟ヲ提擲シツツアツタト云ハルル眞最中ニ、同ジ編者（弄翰子）ガ出版シタル、天保九年板ノ「平安人物誌」ニハ、惟孝ノ姓名ノ更ニ見ヘナイノハ、甚タ怪シムベキデアル、「禁垣ニ接スル」一條新町ニ於テ、十六七年間モ、相當ニ子弟ヲ提擲シツツアツタモノガ、弄翰子ノ眼ヲ追レテ、知ラレズニ經過シ、當人去ツテ數年ノ後ニ、ヤツト氣付カレテ、「平安」ニハ既ニ影モ形モ存セザル先生ノ姓名住所ヲ、アリアリト掲クルナドハ「人物誌」ノ杜撰ハ、云フ迄モナシト雖、此ノ一事ニ依テモ、所謂不如學齋ナルモノガ、如何ナル性質ノモノデアツタカハ、凡ソ推測セラルルノデアル、失敬ナガラ余ノ想像デハ、不如學齋ハ少數ノモノガ門人トシテ出入シタカ、ドウカハ、知ラザレドモ、實際ハ惟孝ノ書齋ノ名デアツテ、塾ト稱スル程ノモノデモナク、主人公ハ、今日所謂家庭教師ガ本職デアツテ、毎日毎日テクテクト、縉紳ノ家ニ出入シ、長袖子弟ヲ相手ニシテ、儒

者風ヲ吹カシテ居ツタモノト、察セラルルノデアル、鈴木氏ハ「貴紳及名門ノ子弟、贅ヲ執リテ來リ學フモノ多シ」ト云ハレタガ、成程十六七年間モ、子弟ヲ教育シ、殊ニ鈴木氏ノ云ハルル如ク、凡儒デナカツタモノナラ、其ノ門人中ニ、多少薰陶ヲ受ケテ人物ト爲ツタモノアリシ筈デアル、余ハ鈴木氏ノ言ニ依リ物數奇ニモ種々ノ方面ニ向テ惟孝ノ門人調ヲナシタレドモ嘗テ一人モ見當ナカツタノデアルガ、其中フト先年「居業餘錄」ヲ讀ンダトキ、何ニカ門人ヲシキ人名ノアツタ事ヲ思出シ、ソレカラ又同書ヲ引出シテ、細カニ調査ヲ遂ケタル所、ヤツト確カニ一人ノ門人ヲ見出シタノデアル、ソレハ他ニアラズ、勘由小路光宙ト云フ餘リ名ノ知レザルオ公家サンラシキ人デアル、鈴木氏ハ惟孝ノ墓ノ事ヲ記シ「門人私識シテ文彬先生ト曰フ」ト云ハレ、如何ニモ堂々タル大儒ノ如ク述ベラルルモ其ノ門人トハ如何ナル人々ナルヤ、御明示ヲ希望スルノデアル、而シテ惟孝ガ京師ニ居ツタコトガ、學問トソレ程重要ノ關係アルコトナレバ

場合ニ依ツテハ「解題」ヲ補足シタイノデアル

(四次キハ惟孝ノ住居ニ付、余ハ馬島瑞園氏ノ言ニ依リ、御玉ヶ池(下谷御玉ヶ池ハ余ノ誤記)ト記シタルヲ、鈴木氏ハ前々號ノ「論叢」市河三陽氏ヨリノ傳聞トシテ、下谷御徒町デアルト正サレ、又前號ノ「論叢」ニハソレハ御自身ノ誤デアツテ、上野山下八軒丁ナリト再正セラレタノデアル、余ハ鈴木氏ノ叱正ヲ感謝スルト同時ニ、兼又同氏ノ批評ノ疎漏ナラザルコトニ感服スルノデアル

(五)鈴木氏ハ余ガ「摘義ノ解題」中ニ、惟孝ハ廣ク文人墨客ト交リ、詩ヲ善クシ畫ヲ能クセリト記シタルヲ指摘シテ、惟孝ノ人トナリ謹嚴ナリケレバ、廣ク文人墨客ノ間ニ周旋スルヲ喜ハザリシナラント余(鈴木氏)ハ想像スト云ハレタルモ、此ノ想像ハ御氣ノ毒ナガラ全ク中ヲヌ想像デアル、其ノ事實ハ余ノ辯ズル迄モ、鈴木氏御自身ニ、前前號及前號ノ「論叢」ニ於テ、明白ニ文人墨客ノ交アリシコトヲ紹介セラレ、殊ニ前號ニハ惟孝ガ平素畏敬親愛セシモノ五名ヲ算ヘ、第一ニ賴杏坪、第二ニ祝星齡、第三ニ摩島松南、第四ニ佐藤一齋、第五ニ市河米庵ヲ擧ケラレタルニアラズヤ、杏坪一齋ハ且ラク措キ星

給、松南、米庵ノ輩ヲ、文人墨客ノ中ニ算入セズトスレバ、鈴木氏ガ指シテ以テ文人墨客トスルハ、如何ナル人デアルカ、聞カマホシ、又鈴木氏ハ當時ノ文人墨客ノ番附面ニモ、惟孝ノ名現ハレ居ラズト云フコトヲ論證セラルルモ、本屋ノ丁稚小僧ノ作リタル「番附」ナドヲ論據トセラルルハ、辯スル迄モナク失當ノ甚タシキモノデアルガ、ソレハサテ置キ其ノ書畫會ニ顔ヲ出シタカ出サナイカラ以テ、文人墨客デアルカ否ラザルカラ批判セントスルモ、亦頗フル奇怪ノ斷定タルヲ免カレナイノデアル、鈴木氏ノ論法ニ依レバ、惟孝ニ親交アリシ杏坪、星給、松南、一齋、米庵等ハ、皆ナ文人墨客ノ番附面ニモナケレバ、書畫會ニモ顔ヲ出サナカツタ人デアルト、云ハチバナラヌノデアル、鈴木氏ノ説ノ當否ハ、余ヨリモ普通書畫屋ノ丁稚小僧ノ方ガ、能ク心得テ居ル所デアル

(六)次キハ余ガ「或人ノ説」トシテ、烟柳坪成ト云フ者ノコトヲ解題中ニ記シタルヲ見テ、鈴木氏ハ「瀧本氏亦其ノ眞僞詳カナラズト評シ居ル程

ナルヲ以テ此點ヲ剔抉センコトハ無遠慮ナルニ似タレドモ而カモ瀧本氏カ或人ノ説ヲ抱懷セラルルハ久キ前ヨリノコトナレバ余ハ敢テ立入リテ所見ヲ吐露スルノ自由ヲ請ハント欲スルナリ」ト、薩張り意味ノ分ラナイコトヲ述ヘラレタルモ、是レハ惟孝ガ竹山ニ對スル邪推論法ヲ祖述セラルル鈴木氏ガ、又例ノ虛擄ト早合點シテ得意ノ皮肉ノ言ヲ弄セラルル様ニ思ハレテ、鈴木氏其人ノ爲メニ、余ノ甚タ遺憾トスル所デアル、然レドモ既ニ此點ニ付キ、御疑アル以上ハ、余ハ余ノ「解題」中ニ記シタル「或人」ハ何人デアルカラ明言スルコトヲ憚ナイノデアル、ソレハ他ニアラズ「國書解題」ノ編者ヲ指シタノデアル、同書ノ初版ニハ烟柳坪成云云ノ事ガ明カニ書イテアツタナレドモ、余ハ固ヨリコンナ事ヲ信ゼザリシノミナラズ、其ノ事實ヲ深ク調査研究スルノ必要ナシト認メタルガ故ニ、穩カニ詳カナラズトシ、暗ニ否認ノ意ヲ以テ、參考ニ供シテ置イタノデアル、實ハ此ノ記事ハ「國書解題」ノ何板ヨリ削除セラレタモノカ、現ニ

余ノ用ヒツツアル最近板ニハ、其ノ記事ハ見ヘ
ナイノデアル、加之ナラズ元來此ノ問題ハ、餘
リ大層ニ名前マデ明示シテ、其非ヲ辯スル程ノ
コトニアラズト思惟シタルヲ以テ、旁々余ハ輕
ク或人ノ説トシテ否認シテ置イタマデノコトデ
アル、ソレヲ鈴木氏ハ余ガ此ノ説ヲ信シテ居ル
カノ如ク曲解シ「瀧本氏ガ或人ノ説ヲ抱懷セラ
ルルハ久キ前ヨリノコトナレバ」云々ナドト云
ハレタルハ誣妄モ亦甚ダシキニアラズヤ、然レ
ドモ此點ニ付キテハ、余ハ敢テ鈴木氏ヲ怨ムモ
ノニアラズ、余ガ隱ニ否認シテ正面ヨリ攻撃セ
ザリシコトヲ、鈴木氏ガ横合ヨリ飛出シテ余ノ
助太刀ヲ試ミラレタルハ、御苦勞ノ至リトシテ
一言謝意ヲ表スルノ外ナイノデアル

(七)最後ニ鈴木氏カ余カ「解題」ノ疎漏トシテ、指
摘セラレタルモノノ中、最モ重大ナルモノト認
メラルルハ、惟孝ノ著述「大學述義」ノ事ヲ明記
セザリシコトデアル、鈴木氏ハ此ノ書ヲ以テ惟
孝ノ識見ヲ窺フベキモノトナシ、大ニ之ヲ讚稱
セラレタルモ、其實本書ハ誠ニ平平凡凡ノ注釋

書ニシテ書中何等ノ創見モナケレバ、細目ニ涉
ル詳説モナク、全ク寺子屋ノ課本トシテ、作リ
タルモノカト思ハルモ、其ノ序文ニ依レバ、
中々左ニハアラデ著者ノ胸臆ニ、三十年ノ間、
鬱蓄シタル大抱負ヲ述ヘテ、子孫ニ傳ヘタモノ
デアルト云フコトデアル、鈴木氏ハ此ノ大言ニ
驚キテ實際本書ノ價直ヲ秤量スルノ暇モナク、
直ニ彼ヲ評シテ凡儒ニアラズナドト揚言シ、且
ツ其ノ「生財有大道」ノ本文ヲ釋述シタル一節、
即チ「雖謂財者本也、然家國天下、而財乏則用不
可爲也、故財用之方亦不可缺也、然貨財者天下之
所同欲也、故貨財亦有大道也、此無他、絜矩而行
之也、凡天下之貨財、生之者多、而食之者寡、則穀
常足、而無飢餓之憂、器用財賄亦然、爲之力、而
用之者儉、則國用常足、物無騰價之慮、如此而貨
財、無停出之患、上下常有贏餘、此之謂大道」ト云
ヘル注釋ヲ引證シテ、「亦一見解ヲ立ツト謂ツベ
シ」ト官評セラレタルハ余ノ竊カニ抱腹ニ堪ヘ
ナイ所デアル、人ヲ賞メルニモ實メ様ガアル、
長戸讓ノ如ク「欽君獨負堂堂氣、不似京城軟媚

生」ナナド、ト無責任ニ仕ノケテ置ケバ、詩人ノ挨拶トシテ、別ニ目立ツタコトモナケレドモ、和漢ノ先輩ガ業已ニ説盡クシタル舊註ヲ、其ノママ切り取り補綴シタル陳腐ノ言ヲ指シテ「一見解ヲ立ツ」ルナドト賞メラレテハ、流石ノ惟孝モ白痴ニアラザル以上ハ、定メテ地下ニ赤面シテ居ジフト察セラルルノデアル、今其ノ證據ヲ示サンニ、朱子ノ語類ニハ此章ヲ解キテ「大槩是專從絜矩上來、蓋財者人之所同好也、而我欲專其利、則民有不得其所好者矣、大抵有國有家、所以生起禍亂、皆是從這裡來云々ト云ヒ、又王步青ガ「匯纂」ノ注ニハ饒雙峰ノ説ヲ引キテ「財者末也、財雖是末、亦是重事、若要生財、亦自有箇大道理、生衆至用舒、四者（是レハ大學ノ本文ニアル）生之者衆、食之者寡、爲之者疾、用之者舒ノ四句ヲ云フ」不可缺一、乃生財之正路、外此皆邪徑也」ト云ヒ、又「大全」ニハ「呂氏曰、國無遊民、則生者衆矣、朝無幸位則、食者寡矣、不奪農時、則、爲之疾矣、量入爲出、則用之舒矣、愚按、此因有土有財、而言以明足國之道、在乎務本而節用、非必外本內

末、而後財可聚也」云云ト云ヒ、又「正解」ノ注ニハ「財雖切于國用、然不貴其能聚、而貴其能生、若要生財、自有正大公平之道、而不同于培兒之小術焉、財以生而裕也、必驅天下之民、而歸之農、使國無遊民、則生者衆矣、財以食而耗也、必節天下之賢、而授之祿、使朝無幸位、則食者寡矣、財之成、由于用也、則必量入爲出、國費有經、而用之舒焉、夫生衆爲疾、以開財之源、而其入無窮、食寡用舒、以節財之流、而其出有限、自然浩々如源泉、而國家之財用、永無不足之憂矣」云云ト云ツテ居ツテ皆大同小異ノ意見デアル、而シテ又日本ノ學者中デモ、熊澤蕃山（大學小解）室鳩巢（新疏）等ノ大儒ヨリ太田錦城（原解）朝川善庵（釋義）等ニ至ルマデ、諸家ノ説、ミナ大抵一致シテ居ツテ體シタ違ヒハナイノデアル、原來大學ノ此ノ一節ハ分リ切ツタ所デアツテ、和漢ノ學者中、餘リ異論ハナイヨウニ思フノデアル、唯々「生財有大道」ノ大道ト云フコトニ就テハ多少ノ議論アルモ其他ノ點ニ於テハ、和漢ノ諸家殆ント異論ナイト云ツテモ宜イノデアル、而シテ惟孝ノ「述

義」ノ解釋ハ大體「大學」ノ本文通りデ、朱子ヲ始メ此等諸家ノ解釋ト、少シモ異ナツタ特色ノナイコトハ一見シテ明カデアル、乃チ換言スレバ惟孝ハ前輩ノ云及ボシタル言辭ヲ、其儘綴リ合セタダケデアツテ、其ノ意義ハ、彼ガ生前ヨリ、一般ニ行ハレ居タル、四書ノ俗解「經典餘師」ナドニスラ解釋サレテ居ルモノト異ナラザルノデアル、畢竟此ノ「大學述義」ナルモノハ我カ經濟學ノ立場ヨリ、之ヲ看察スレバ、勿論一顧ノ價直ナキモノトシテ差支ヘナシト信スルノデアルガ、知ラズ漢學者ハ尙此書ニ於テ何ニカ取ル所アリヤ否

「大義述義」ハ右ノ如ク俗書ニシテ到底見ルニ足ラサルモ、惟孝ノ著述トシテ、比較的上出來ノモノハ「居業餘錄」デアル、本書ハ明ノ胡叔心(名ハ居仁、敬齋ト號ス、朱子學者ナリ)ノ著ハセル「居業錄」ニ因ンデ「餘錄」トシタルモノデアラフ、此ノ書ハ全篇漢文ニ認メ、硬キ隨筆トシテハ、相當ノ價直アルモノデアル、書中大ニ聖賢ヲ氣取り、又故ラニ忠義ヲ銜フカ如キ形跡アル

ハ、チト氣障ニ聞ユレドモ、兎ニ角ニ著者ガ支那學ノ素養アリシコトハ、此ノ書ニ依ツテ明白デアツテ、余ガ「解題」ニ、敢テ儒者トハ云ハザリシモ「漢學ニ長シ」云云ト評シタ所以ハ主トシテ此ノ書アルガ故デアル、サテ「餘錄」ハ一半ハ朱子ヲ奉シテ、其ノ説ヲ鼓吹シ兼テ又楠公及赤穂義士ナドニ關スル珍ラシクモナキ周知ノ事蹟ヲ載シ、他ノ一半ハヲモニ詩話及書法ナドヲ説キタルモノデアル、何様朱子ヲ尊重スルコトハ體シタモノデアツテ、其ノ第二卷ニ「朱文公後學之泰斗、其人品學行、恐孔孟以後所希矣、是以自政治經濟、至文藝武事、莫所不具也、實可謂聖賢其人矣、故後世學校之教、必主朱學者、蓋爲此也」ト云フガ如キ、態度デアツタノデアル、故ニ其ノ反對ノ學派、殊ニ所謂事功學者(我我ノ見ルベキ經濟學説ハ多ク此ノ派ニアリ)ナドハ口ヲ極メテ之ヲ詆排シ、王安石ニ付キテハ、世上ノ俗説ニ從テ「其言正、而其人邪者、王荊公是也」ト評シ、陳龍川ハ「侈然無忌憚、遂陷功利一途、而自不知其非」ト誹リ、尙明人ニ對シテハ辟

暄、丘濬等ヲ小家トシテ之ヲ取ラザリシハ彼ノ意見ガ如何ニ偏狹ナルカラ證スルニ足ル、且ツ又歐陽修、曾鞏等ノ文ヲ以テ、經濟之文トシ、李觀葉水心ノ文ヲ以テ、文人之文ト爲セルガ如キハ、概ネ皆事實ニ反スル僻見デアアル、惟孝曰ク、學問不涉于經濟、雖其所學多矣、又何以爲乎、孔子曰、貨惡其棄於地也、不必藏於己、力惡其不出於身也、不必爲己、是斯二語、包羅許多經濟盡矣、人能常擴充此意、而措之家國天下、則經濟之道、自餘裕矣トハ、當時ノ學說トシテハ一應尤モニ聞ヘタル言辭ナレドモ、惟孝ガ他ノ場所ニ於テ、述フル所ノ意見ニ依レバ、矢張聚矩一點張りデアツテ、更ラニ少シモ孔子ノ意ヲ擴充スルコトヲ爲サナカツタ様ニ思ハルノデアアル、加之ナラズ茲ニ一ツノ笑フベキハ、管子ノ說ヲ功利ノ術トナシテ大ニ之ヲ排斥シ、耿壽昌、桑孔等ヲ推獎スル者ヲ、吾徒ニアラズトシテ賤ミナカラ、徳川家康ヲ以テ仁義忠信ノ人トナシ、盛ニ之ヲ崇拜スルカ如ク吹聴シタルハ、彼ガ京都在住ノ際、權門ニ出入シテ、竊ニ其ノ眷顧ヲ求メ

シコトヲ勉メタル筆法ヲ、關東ニ應用セント試ミタルモメニアラサル乎ト、推斷スル者アレバ余ハ其ノ辨明ニ苦マザルヲ得ナイノデアアル、(居業餘錄ハ惟孝江戸へ移リタル後ニ成レルモノナルコトヲ記憶スベシ)然レドモ斯クノ如キコトハ、當時ノ俗儒ニ、アリ勝ノコトトシテ、大目ニ之ヲ看過シ、唯唯其ノ「居業餘錄」ノ性質ニ就キ、之ヲ批判スレバ、先ツ惟孝ノ傑作トシテ其ノ力量ヲ見ルニ足ルベク、彼カ篠山藩ニ抱ヘラレテ、二十人扶持ヲ難有頂戴シタルハ、固ヨリ過分ノ厚遇ニハアラザルベシト思フ
鈴木氏ハ惟孝ノ人トナリヲ稱揚シ、頻リニ謹嚴ナリシコトヲ吹聴セラレタルモ、彼カ謹嚴ノ證據トテハ、一モ舉ケラレタルコトナク、却テ不謹嚴ラシキ證據ハ澤山ニアル、即チ「摘義」ノ中ニハ、往々臆測ヲ以テ竹山ヲ誹謗スル廉廉モ少ナカラズ、又學校設立ノ事ニ關シ、眞面目ニ某公へ奉リタル建議中ニ「讀書講學之餘、醉花吟月、終生有餘饒」ナドト生風流メキタコトヲ云ヘルノミナラズ、前記「居業餘錄」ノ詩話中ニハ、頗

フル振ツタモノモアル、例へハ盧全ガ有名ナル
 有所忠ノ詩、當時我醉美人家、美人顔色嬌如花、
 今日美人棄我去、青樓朱箔天之涯ノ句ヲ擧ケテ
 大ニ之ヲ贊稱シ、「字々清妍、句々含情、餘韵流
 暢、使讀者欲已而不能已」ナドト、評シ居ルヲ見
 レバ、此ノ翁、朱子學ヲ表榜シテ居ツテモ、中々
 隅ニ置ケヌ先生タルコトハ明カデアル、前ニ述
 ヘタ馬島瑞園氏カ余ニ讓テ吳レタ書幅ハ、今ニ
 收藏シテ居ルガ、其詩ハ幕末ノ風流政治家タリ
 シ松堂間部侯邸ニ於ケル雅集ノ絶句デアツテ
 「風流間日月、名教好春秋、這裏存真樂、不須情莫
 愁」トアル、是レハ此ノ雅集ニハ例ノ如ク藝者ナ
 ド呼バナクツテモ面白イト云フ様ナ意味ニモ解
 セラルルノデアルガ、ソレハ別問題トシテ、兎
 ニ角惟孝ガ風流心ニ富ンデ居ツタコトダケハ疑
 フ可ラザル事實デアアル、風流心ト不謹嚴トハ、必
 スシモ直接ニ因果關係アリトハ固ヨリ斷言スベ
 カラザルモ、鈴木氏ガ謹嚴謹嚴ト云ハルハ、
 チト怪シイ様ニ思ハルルノデアアル。

然レトモ惟孝ガ謹嚴デアツタカ、撫カツタカハ、余ノ關ズル所

デハナイ、余ハ我國ノ經濟學說ノ上カラ見テ、彼レハ地平線以
 下ノ人物デアルト信ジ、餘リ重キヲ置ナカツタノデアアル、故ニ
 「叢書」ノ解題ヲ草スルニ當リ、惟孝ノ傳ナドハ省略ノ出來ルダ
 ケ省略シタノデアアル、元來余ノ解題ノ繁簡詳略ハ別ニ標準モ何
 モナク、分ツテ居ツテ略シタモノモアレバ、分ラズシテ書クコト
 ガ出來ナカツタモノモアル、現ニ叢書二十六卷ニ收容シタ「西
 澤田祖考」ノ著者伊地知季安ノ傳ナドハ、分ラナカツタ故、少シ
 モ書カナカツタラ、在庭兒島ノ小出滿二君ヨリ、詳明精細ノ傳記
 ナ送り越サレ、余ハ大ニ感謝シテ居ルノデアアル、季安ノ方ガ惟孝
 ヨリハ、餘程重要ノ人物ト認メタノデアアルガ、知ラナイカラト
 云ツテ、鈴木氏ガ容易ニ出來得ルコトト信スルガ如ク、事實チ
 「麻搦」スル譯ニモ行カナイカラ、致シ方ガナイノデアアル、實ハ余
 ノ解題ニハ、勿論云フ迄モナク、澤山ノ誤謬モアレバ、疎漏モア
 ル、是レ等ノ誤謬疎漏チ指摘シテ、精確ノ報告ヲ賜リタル方々
 ハ、今迄ニ少ナクナイノデアアル、余ハ一々鄭重ニ之ヲ保存シテ、
 「叢書」ノ終卷ニ一纏メニシテ、發表セント欲スルノデアアル。併
 シ省略チ遺忘トシ、誤聞チ虚構ナドト稱シ、且オ責ケニ想像邪
 推チ以テ、徒ラニ駄辨チ弄セラルルコトハ、自他ノ爲メ無益ノコ
 トナレバ此レダケハゴ免テ蒙リタイノデアアル、

尙ホ鈴木氏ニ願ヒタイノハ、惟孝ガ凡庸ニアラズト云ハルルナ
 ラバ、血統調ヤ戸籍調デナク、今少シク彼ガ學說ノ卓越シタル廉
 廉デモ明ニシテ、其ノ眞ニエラキ所以ヲ示サレタイノデアアル、
 余ハ惟孝ノ郷里及其ノ遺族ニ縁故ナクシテ、材料ニ乏シケレ
 バ、此ノ事ハ偏ヘニ鈴木氏ニ向テ懇望スル次第デアアル

雜錄 濱物机上觀

附言 鈴木氏ハ、惟孝ノ先祖ノ事ヲ記サレタルガ、彼ノ永宗助九郎ト云フ者ハ、本姓丹羽田ニテ、父是忠ノ職没後、流浪シテ江州ニ來リシコトアリ、其後故郷信州諏訪ニ歸リ、村民ガ淫祠ノ怪異ニ苦ミ居タルヲ、平ラゲタル偉功ノ爲メニ、其ノ村民共ヨリ、神トシテ尊奉セラレタト云フ緣故ニ依ツテ、自ラ神ト改姓スルニ至ツタソウデアル、如何ニ蒙昧ノ世ノ中トハ云ヘ、自ラ姓ヲ神ト稱シテ憚ラズト云ノハ、チト狂氣ジミタ行動ニハアラザルカ、ソレヨリ子々孫々、皆此様ナ誇大狂デアツタカ、ドウカ知ラザレドモ、鈴木氏ノ證言ニ依レバ、惟孝ノ父永年トカ云フ人ハ、チト怪クナイカト思ハル「人ト爲リ骨硬苟モ詭隨セス此ヲ以テ世ニ合ハズ」ト云ヘバ、少シ血統ヲ引キテ居ルカノ疑ナキニアラズ、殊ニ其子ナル問題ノ本人惟孝ニ至テハ、余ハ慥カニ誇大狂ノ患者タルコトヲ疑ハナイノデアル、惟孝ノ子惟徳ガ成城學校ヘ教官トシテ、日日登校スルニ「ふろつくこーご」ヲ着シテ威張ツテ居ツタコトハ、別ニ何ンデモナイコトカモ知レザレドモ、兎ニ角鈴木氏ノ血統調ニハ遺傳ノ有無ヲ御看追アル可ラサルコトト信スルガ故ニ、序ヲ以テ一言ノ御注意ヲ催シタル次第デアル、惟孝ガ誇大狂デアルヤ否ハ、彼ガ著述ノ眞價ヲ秤量スルニ於テ、重要ノ關係アルコト勿論ナレバ、余ハ故人ノ血統ヲ議スルガ如キ言語ヲ吐露スルニ忍ヒザレドモ、鈴木氏ノ御質問ニ困ツテ勢、此ノ事ニ及ンダノデアアル、讀ム人幸ニ諒察シ玉ヘ。